

World Outlook [いまを読む]

女子大は必要なのか?
女性の人生への「介入」に意義

キャスリーン・マッカートニー Kathleen McCartney (スミスカレッジ学長)

日本だけでなく、米国でも女子大学の共学化が進んでいる。もはや女子大は時代遅れなのだろうか。米国屈指の女子大として知られるスミスカレッジの学長は、いまもまだ、女性の人生に対する「介入」には意味があると語る。



illustration: Okubo Naoto



エール大で心理学の博士号を取得。幼児期教育が子どもの発達に与える影響を研究してきた。ハーバード大教育学部の大学院学部長を経て2013年、スミスカレッジ11代目の学長に就任。同年、ハーバード大学女性功績賞。

—— いまなぜ、女子大学が必要なのでしょうか。

女子大に行くということは女性の人生に対する一つの介入です。

現実の社会には女性に対する偏見や差別、ハードルがまだたくさんある。でも女子大では、教授や職員たちも、すべてが女性であるあなたに关心を持ってくれる。男子学生がいないことで、差別されることのない環境が整えられています。

学生自治会の役員も、大学紙の編集長も女性。リーダーシップを取るのも、すべてが女性です。卒業生と話すと、「スミスにいる時に女性であることに自信を持てた。どんなことでもできるんだという達成感を得られた」と言います。

女子だけの環境の中で、リーダーシップをとり、トップに立つ経験をすることがとてもプラスになるのです。

米議会では女性議員の20%が女子大の卒業生です。大学生の女子のうち女子大に行く人が約2%あることを考えると、女子大が輩出しているリーダーの割合が大きいことがわかります。

—— 受験生からも人気があるんですか。

過去30年間で、多くの女子大が共学に変わってきたのは事実です。でも、上位の女子大は、女子大であることを貫いており、人気は根強いまま。人気の高まっている大学もあります。1871年創立のスミスカレッジでは過去9年、志願者は

増え続けています。昨年は志願者数が12%も増えたんですよ。

バーナードカレッジなど、歴史あるほかの女子大も似た状況です。米国だけでなく、海外の学生たちからも人気があり、68カ国から学生を受け入れています。

男性がいないという点で、一般社会とは違う環境に自分を4年間置くことでしか得られない経験があります。共学の大学がほとんどであるなか、あえて女子大を選ぶというトラディショナルではない選択をする。新しい挑戦をすることに、高校を卒業する年代の子たちが関心を持っています。

—— 今年は女子大出身の米大統領が誕生するかもしれません。

サッチャー元英首相をはじめ、世界のあちこちで素晴らしい女性たちがトップに立って国を治めているにもかかわらず、アメリカはその点でとても遅れています。いよいよ、1人出るかなあという感じですね。

スミスカレッジでは、在学生を対象に、女性のリーダーシップスキルを高めるための特別なプログラムをいくつも用意しています。ビジネスの現場ですでに活躍している女性たちにも開放しています。

最近、ブルームバーグ・ビジネスウイーク誌が発表した米国女性の「ライジングスター」50人のうち、3割が女子大の出身者だったんですよ。

—— 男性もいる現実社会への適応が難しくなるということはないですか。

完全に隔離されているわけではありません。すぐ近くにいくつも共学の学校があって、そこに行って授業を受けることができるし、そちらの学生もスミスに来るので、教室内に全く男性がないというわけではありません。課外活動での交流も活発です。ただ、大学にいる間にこういう女性だけの社会も成り立つんだよ、という理想的な形を経験することで、自信を持つという女性がたくさんいるのです。インディアナ大学の調査では、女子大の学生の方が共学に通う学生に比べて、教授陣と相互により大きな影響を与え合っているという結果が出ています。

—— 女子大は過去の遺物ではないと?

歴史的にみれば、設立された当初のころの方が、女子大の必要性は大きかったでしょう。当時は、女性はなかなか良い教育の機会に恵まれなかったのですから。

米国には50年前には、200以上の女子大がありました。今では44に減っています。しかし今も、女子大という選択肢が残っていることは重要なのではないでしょうか。

学生が大学を選ぶのはいろんな理由があります。「ニューヨークに憧れているから、ニューヨークの大学に行く」とか、「山に登りたいから、自然の豊かな地方の大学に行く」とか。そうした中で、我々が女子大であり続け、女子大という選択肢を提供し続けることには意味があると思っています。◎

(構成 GLOBE 記者 田玉恵美)

[私の海外サバイバル 113]
Business Life in

Bangkok/Thailand タイ(バンコク)

ゼロから一人で画廊経営 タイの絵画批評も

鈴木敦子
アコ画廊オーナー

すぎき・あつこ／1943年、満州生まれ。64年に東京写真短大(現・東京工芸大)を卒業し報道カメラマンに。68年、バンコクに移住。90年末に同市スクンビット通り沿いにアコ画廊を開いた。



バンコクの「アコ画廊」には、毎日、多くの人が訪れる。右から2人目が鈴木さん

東南アジア屈指の大都市で、経済や交通の拠点。チャオプラヤ川が南北を貫く。歴史的建造物が多数存在し、世界で最も観光客が多い都市の一つとしても知られる。人口約850万。



アーティストから借りた10点ほどの絵しか集められず、土産物も一緒に並べていました。

それから26年間、何度か危機に見舞われつつも画廊を続け、100回以上の展覧会を開いてきました。苦しい時に大口の仕事が舞い込んだり、英国から戻ってきた夫のアドバイスで思い切って実施したイベントが成功したりと、幸運にも恵まれてきました。

今では、タイの新人画家の作品を批評するのも仕事の一つ。タイの人は他人の作品をめったに批判しません。若いアーティストは、私の歯に衣着せぬ言葉を求めてやってくるようです。

ON バンコクに来たきっかけは、当時付き合っていた英国人のボーイフレンドが、この地で定職を得たからです。その後、2人ともタイの永住権を取得し、結婚。夫は友人とドイツ料理のレストランを経営して成功し、私は仕事をやめて専業主婦をしつつ油絵を習うなど、優雅な生活を送った時期もあります。

ところが、夫がアルコール中毒に。断酒会に入つてようやくお酒をやめられたと思ったら、今度は重度のうつ病になりました。医師の勧めで夫は英国に一時帰国。レストランも閉め、私は48歳で2人の娘を抱え、ゼロから生活を立て直さざるを得なくなりました。

商売をしようと考えた時、好きな絵のことが頭に浮かびました。

私の名前「アツコ」はタイ人には発音しづらいので、「アコ画廊」と名付けました。1990年にオープンした当時は運転資金がなくて、友人の

OFF 日曜日には教会に行きます。つらいことがあります。心の中で神さまに文句ばかり言っていますけど。教会の後は、「ゆっくりしたいな」と思いつつ、他の画廊に足を運ぶことが多いです。◎ (構成 GLOBE 記者 太田啓之)